様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４４７４

研究課題名（和文）遺族のニーズに応じた多層的な心理社会的支援の展開と効果の検証

研究課題名（英文）Development of multi-tiered psychosocial support for the needs of bereaved families and verification of its effectiveness

研究代表者
坂口　幸弘（Sakaguchi, Yukihiro）

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：００３６８４１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の一つは、Bereavement Risk Assessment Tool日本語訳版の一定の有用性を確認したことである。全国の救命救急センターを対象とした調査では、遺族支援の実施施設は17.9%であり、看護管理者の69%は必要だが現状として難しいと認識していた。全国のホスピス・緩和ケア病棟を対象とした調査では、遺族支援の実施施設は82%で、実施上の困難として時間的な余裕やケア提供者へのトレーニング、組織体制が不十分であることが挙げられた。豊中市保健所での遺族支援事業は、市民が安心して利用できるとともに、精神疾患のハイリスク者に対して継続的支援ができる点で有用であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義の一つは、遺族のニーズやリスクのアセスメントに着目し、アセスメントツールの実用性を検討したことである。また、救命救急センターやホスピス・緩和ケア病棟での遺族ケアの実態を明らかにしたことは、わが国での遺族支援のあり方を検討するための学術的な基礎資料であるといえる。そして、10年以上に及ぶ豊中市保健所における遺族支援の実践研究は、コロナ禍での新たな取り組みも含め、一定の成果を生み出しており、多様なニーズやリスクを有する遺族を対象とした多層的な心理社会的支援の一つのモデルとして、社会的な意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：One of the research results was that we confirmed the usefulness of the Japanese version of the Bereavement Risk Assessment Tool. Our nationwide survey of all emergency departments in Japan reported only 17.9% emergency departments in Japan provided bereavement follow-up strategies, and 69% of the nurse leaders perceived bereavement follow-up to be necessary but difficult. Our nationwide survey about the current practice of bereavement supports among Japanese hospices and palliative care units showed that 82% of the respondents did offer bereavement follow-up programs, and about 70% of them perceived several different difficulties to be resolved such lack of time, caregiver training, and organizational support. The bereavement services at the Toyonaka City Public Health Center has been shown to be useful in that citizens can use it with peace of mind and can provide continuous support to people at high risk of mental illness.

研究分野：臨床死生学

キーワード：死別　悲嘆　遺族支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国では 2000 年代に入って以降、遺族への支援や介入は、グリーフケアやビリーブメントケアなどと呼ばれ、新聞やテレビ番組などで取り上げられる機会も増えており、関連書籍の出版も相次いでいる。近年では、自死遺族への支援や、東日本大震災の被災者遺族への支援などで注目されることも多かった。一方で、学術分野においては、遺族への支援や介入に関する個別事例的研究は散見されるものの、遺族のニーズのアセスメント方法や、心理社会的支援の開発及び効果に関する検証は、十分に行われてきたとはいえない。遺族への支援や介入は、一次予防的介入、二次予防的介入、三次予防的介入という 3 カテゴリーに分類される。一次予防的介入とは、介入の適応があるかどうかにかかわらず、全ての遺族に予防的に援助を提供することである。二次予防的介入とは、不適応のリスクが高い遺族に対象を絞って早期に提供される援助である。そして三次予防的介入とは、遷延性悲嘆症や、併発した精神疾患に対して行われる介入のことである。わが国の現状としては、ホスピス・緩和ケア病棟を中心に、手紙送付や追悼会など一次予防的介入は広まりつつあり、また三次予防的介入の試みも進みつつある。しかし一方で、遺族のニーズやリスクのアセスメントに基づく、二次予防的介入はほとんど行われていない。実際、遺族のリスクやニーズは、大きく 3 つのカテゴリーに分類され、遺族全体のうち、低リスク群（家族や友人からの支援のみで対処できる人）は約 60%、中リスク群（ピアサポートなど第三者からの支援を必要とするかもしれない人）は約 30%、高リスク群（メンタルヘルスの専門家からの援助が必要となるかもしれない）は 10%といわれている。遺族のニーズやリスクは均一ではなく、そのレベルに応じた多層的な心理社会的支援が求められる。遺族への介入の効果に関する研究レビューでは、全ての遺族に一律に効果があるのではなく、リスクの高い遺族に対象を絞った場合に、効果が認められることが指摘されている。したがって、有効かつ効率的な遺族への支援を行うためには、遺族のリスクやニーズに応じた支援プログラムを提供することが重要であり、そのための遺族のアセスメントが必要であると考えられている。そして、アセスメントの質が、遺族への支援の有効性に関係するとの指摘もある。そこで本研究では、遺族のニーズやリスクを客観的に把握するための臨床的に有用なアセスメント方法を検討する。また、医療機関や自治体など、さまざまな場での遺族の多様なニーズに対応した多層的な心理社会的支援についても検討し、その効果を検証する。

２．研究の目的

本研究の目的は、死別を経験した多様なニーズや背景をもつ遺族をいかに支援するかを命題として、適切なアセスメントに基づく遺族への多層的な心理社会的支援の方法を確立させることである。その実現に向けて、本研究では、①遺族のニーズやリスクを把握するためのアセスメント方法の検証、②多層的な心理社会的支援の実施に向けての現状と課題の把握、③さまざまな場での多層的な心理社会的支援の効果の検証を行う。

３．研究の方法

(1)葬儀社が毎月開催しているサポートグループへの参加遺族のリスクアセスメントと、当該遺族を対象とした郵送による自記式質問紙調査を実施した。参加遺族のリスクアセスメントは、サポートグループの運営スタッフによって、Bereavement Risk Assessment Tool（BRAT）の日本語訳版を用いて行われた。最終的に計 39 回のサポートグループにおいて、延べ 478 名に関するアセスメントを行い、BRAT の評定データを収集した。なお、本調査は関西学院大学人を対象とする行動学系倫理委員会の承認を得たうえで行った。

(2)全国の救命救急センター289 施設（2018 年 4 月 1 日時点での日本救急医学会の公表資料）の看護管理者を対象に、質問紙調査を実施した（2018 年 11 月～12 月実施）。151 施設より回答があり、有効回答は 149 施設（有効回答率 57.7%）であった。採用する救急医療システムは、「三次救急型」が 92 施設(61.7%)、「北米 ER 型」が 54 施設(36.2%)、「その他」が 3 施設(2.0%)であった。救急外来での年間死亡患者数は、「100 人未満」が 37 施設(24.8%)、「100 人以上 200 人未満」が 53 施設(35.6%)、「200 人以上 300 人未満」が 18 施設(12.1%)、「300 人以上」が 9 施設(6.0%)、「不明」が 32 施設(21.5%)であった。なお、本調査は関西学院大学人を対象とする行動学系倫理委員会の承認を得たうえで行った。

(3)全国の緩和ケア病棟入院料届出受理施設 457 施設（2022 年 4 月 1 日時点）の看護管理者を対象に、オンライン調査を実施した（2022 年 6 月～7 月実施）。222 施設より回答があり、有効回答率 48.6%であった。2021 年度の年間死亡者数は平均 156.8 名（SD=79.2）であり、平均在院日数は 29.7 日（SD=20.5）であった。医師（専任）数は平均 1.9 名（SD=1.6）であり、看護師数は平均 18.3 名（SD=4.9）であった。なお、本調査は関西学院大学人を対象とする行動学系倫理委員会の承認を得たうえで行った。

(4)多層的な心理社会的支援の効果の検証として、豊中市保健所でのグリーフケア事業の成果について検討を行った。当該事業は、2012 年度より、自殺・うつ病対策として実施され、①講演会の実施、②わかちあいの会の開催（年 4 回)、③リーフレットによる啓発活動を 3 本柱として、今年度も継続して実施している。コロナ禍を含め、各年度の活動の成果をまとめるとともに、参加遺族を対象としたアンケートの結果を集計した。

４．研究成果

(1)質問紙調査の結果、参加遺族 109 名から回答が得られた。回答者の性別は、男性 32 名、女性 77 名、年齢は 40～87 歳で平均 69.5 歳であった。故人との続柄は、配偶者が 86 名、子が 14 名、親が 7 名、その他が 2 名であった。死別からの経過期間は 2～120 カ月で、平均 39.8 カ月であった。簡易版複雑性悲嘆質問票 BGQ による評定の結果、回答者の 15%に複雑性悲嘆が疑われた。PHQ-9 日本語版による評定では、回答者の 19%にうつ病の疑いが示された。BRAT によるリスクアセスメントと質問紙調査の双方のデータに含まれる遺族 30 名を対象に解析した結果、故人に対する続柄は、妻が 18 名、夫が 7 名、子が 5 名で、年齢は 43～87 歳、平均 68.0 歳であった。運営スタッフによるアセスメントでは、リスクレベル 1（リスクは無い）は 16 名、2（最小リスク）は 7 名、3（低リスク）は 2 名、4（中リスク）は 5 名、5（高リスク）は 0 名であった。リスクレベルと、複雑性悲嘆（BGQ）および抑うつ（PHQ）との関係について、有意な関連性が認められ、リスクレベル 4 の遺族において複雑性悲嘆と抑うつの高リスク者の割合が高かった。

今回の調査結果から、Bereavement Risk Assessment Tool（BRAT）の日本語訳版の一定の有用性が確認されたといえる。他方、遺族自身の BRAT による自己評価では、運営スタッフの評価よりも高いリスクレベルに評定される割合が多かった。第三者によるアセスメントの運用にあたっては、潜在的なリスク要素を十分に把握し切れずに、リスクがやや過小に評価される懸念があり、留意する必要があることが示唆される。

(2)救命救急センターによる遺族支援の実施状況として、遺族支援を実施している施設は 26 施設(17.9%)であった。遺族支援を実施している施設のうち、実施内容は、「心療内科・精神科医や臨床心理士などの専門家の紹介」が 38.5%、「遺族が利用できる地域資源を紹介する冊子の配布」が 38.5%、「死別後に必要な手続きと方法について紹介する冊子の配布」が 30.8%、「追悼会の開催」が 26.9%、「死別によって生じる心身の反応と対処方法を紹介する冊子の配布」が 15.4%であった。必要性の認識について、149 施設のうち、「必要だと思うが、現状として難しい」と回答した施設は 69.0%、「必要だと思うし、行うべきである」が 24.1%、「必要だと思わない」が 3.4%、[その他]が 3.4%であった。看護管理者が認識する救命救急センターによる遺族支援の課題としては、「人員の確保」が 83.4%、「スタッフの知識・技術」が 63.4%、「多職種連携」が 62.1%、「遺族支援のアセスメント方法」が 60.7%、「指導的立場の人材育成」が 55.9%、「スタッフの関心・意識」が 55.2%、「スタッフの精神的負担」が 53.8%、「行政や地域資源の活用」が 53.1%、「遺族のニーズの把握」が 51.7%、「医師との連携」が 44.1%、「遺族支援の効果の評価」が 43.4%、「費用の確保」が 41.4%であった。

今回の実態調査を通じて、わが国の救命救急センターにおいては、遺族支援の取り組みが 2 割未満と少ないことが明らかとなった。また、9 割以上の施設が遺族支援を必要と認識しつつも、約 7 割の施設が現状では難しいと考えており、救命救急センターでの遺族支援を実現するためには、現状の課題を踏まえた新たな仕組みを検討する必要があると考えられる。

(3)遺族支援を行っていると回答したホスピス・緩和ケア病棟は 82%であったが、そのうち、19%がコロナウイルス感染症の影響で休止していると回答した。最も多く行われていた(コロナ禍での休止中も含む)遺族支援サービスは手紙送付で 77%、次いで追悼会が 51%であった。接触する機会を持たない手紙送付の休止は実施施設の 11%であったが、追悼会はこれまで行っていた施設の 89%が休止していると回答した。また、遺族には遺族支援のニーズがあると回答した施設は 95%であった。遺族支援を行う上での課題や障害については、「時間的な余裕がないこと」（74.3%）との回答が最も多く、次いで「ケア提供者へのトレーニングが十分ではないこと」（71.6%)、「組織としての体制が十分ではないこと」(69.4%）であった。コロナ禍においては、通常通り遺族支援ができていた施設は 15%に過ぎず、コロナ禍の遺族支援の困難さが示された。コロナ禍に遺族支援として新たに工夫し取り組んだ施設は 15%であり、その内容では、寄せ書きの送付や患者生存中の家族ケアでのできる限りの配慮が挙げられた。

今回の調査は、全国のホスピス・緩和ケア病棟での遺族支援の取り組みを俯瞰的に捉え、その実施状況や問題点、今後の課題について明らかにするものであり、得られた知見の資料的価値は大きいといえる。回答が得られた施設の 9 割以上が、遺族支援に対する遺族のニーズは少なからずあると認識し、コロナ禍で休止中の施設も含め、約 8 割の施設が何らかの遺族支援を行っており、ホスピス・緩和ケア病棟において遺族支援が広く行われていることが示唆される。一方で、半数以上の施設が共通して抱える課題として、時間的に余裕がないことやトレーニングの不足、組織の体制や人員不足の問題が明らかとなり、組織として遺族支援を行う体制をどう整えるのかは今後の大きな課題といえる。また本研究では、コロナ禍における遺族支援の実態として、通常通り実施できていたのは 15%の施設に限られており、多くの施設において遺族支援の活動が制限され、2022 年 8 月の調査時点においてもコロナ禍以前のようには実施できていないことが

示された。今回の調査で得られた結果をもとに、今後、各施設での検討だけではなく、スタッフの研修や社会的資源との連携、コロナ禍での新たな取り組みなど、施設の枠を超えた課題も含め、遺族支援の将来のあり方を考えていく必要があると考えられる。

(4)豊中市保健所での遺族支援事業に関して、2012 年度～2018 年度の成果をまとめたところ、講演会の開催は 9 回（うち 2 回はミニ講座）で、のべ 238 名が参加し、1 回平均は 26 名であった。男女比は 1:7 で、平均年齢は 62.3 歳であった。参加者アンケートの結果、「とてもよかった」「よかった」との回答が 93%であり、参加者の満足度が高いことが示された。わかちあいの会に関しては、参加者数は実人数 71 名（うち男性 5 名）、延べ人数 100 名（うち男性 5 名）であり、平均年齢は 63.4 歳（38 歳～86 歳）であった。各回の参加者は 2～13 名で平均 7.1 名であった。参加遺族を対象としたアンケート結果によると、41 名中 25 名（61%）において、大うつ病性障害の疑いが認められた。参加遺族の感想として、「ずっと心に抱えていた気持ちを初めて吐露できた」「他の人も同じように悲しみを抱えて生きていることがわかった」「この場でしか話せない大事な場所」などがみられた。リーフレットは研究代表者が監修して作成し、2016 年 9 月から現在までに約 60,000 部を発行した。豊中市で市民課に死亡届を出した人全員に配布しており、リーフレットを通じて相談につながったケースも散見されている。身近な公的機関である保健所が遺族支援事業を実施することで、必要としている人が安心して利用できるとともに、事業を通じて把握したうつ病等の精神疾患のハイリスク者に対して継続的な支援ができることの意義は大きいと考えられる。

2020 年度は、COVID-19 の感染拡大の影響で、豊中市保健所での遺族支援事業は計画の中止・変更を余儀なくされ、地域の遺族等を対象としたオンデマンド配信による講演会を 2 回と、Zoom による分かち合いの会を 1 回のみ実施した。講演会は計 88 名が受講し、例年の対面実施を上回る参加者数であった。両事業とも苦肉の策ではあったが、受講者の満足度は高く、新たな支援の展開につながるものと期待される。

2021 年度は、講演会のオンデマンド配信を継続実施した一方で、2021 年 3 月に約 2 年ぶりとなる対面での講演会と分かち合いの会を実施した。分かち合いの会への参加者は 13 名で、市の広報誌で情報を得て参加した方が 9 名と多かった。全体としての参加満足度は、「とてもよかった」が 5 名、「よかった」が 8 名、「ふつう」や「よくなかった」との回答はみられなかった。参加して良かったことに関する自由記述回答として、「自分一人で悲しみ苦しみをかかえていたが、それぞれ悩みを持っていることを知り、自分だけでないことがわかりました」「いろんな方の話を聴いて、また自分も感じたことを話せて、思考の整理が少しできた」「若い人はオンラインでできるけど、高齢者は対面の方がやはり良いと思いました」などがみられた。今回は、感染対策の一環で、通常よりも短時間の開催で、加えて想定以上に参加者も多かったため、やや時間不足であった感は否めなかった。とはいえ、オンラインでの実施に比べ、それぞれの率直な思いが語られ、共有することがスムーズにでき、対面実施の意義が感じられた。

2022 年度は COVID-19 に伴う研究活動の制約はかなり解消されたが、いまだコロナ禍以前の活動状況に戻せていない。コロナ禍前は、地域の遺族等を対象とした対面での講演会や分かち合いの会を 3 カ月に 1 回実施してきたが、コロナ禍ではオンラインでの取り組みのみに限定され、ようやく昨年度から対面での活動を少しずつ再開してきた。今年度も昨年度に引き続き、心理教育的な要素を含んだ遺族向け講座のオンデマンド配信に加え、回数や時間を減らす形で対面での講演会と分かち合いの会を実施した。今年度は大阪府下の他市の保健所においても、主に遺族を対象とした同様の講演会を実施した。豊中市保健所での遺族支援事業は 10 年目を迎え、わが国での自治体が主体となった遺族支援事業の一つのモデルとして、各地に展開されていくことが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計28件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 坂口幸弘	４．巻 51(12)
２．論文標題 求められるグリーフケアと問われる故人との関係性	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 185-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂口幸弘、赤田ちづる	４．巻 43(2)
２．論文標題 COVID-19 で亡くなった患者の遺族へのサポート	５．発行年 2023年
３．雑誌名 月刊精神科	６．最初と最後の頁 182-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂口幸弘	４．巻 64(12)
２．論文標題 死別による悲嘆をケアすることの大切さ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 精神医学	６．最初と最後の頁 1581-1586
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西岡秀爾、坂口幸弘	４．巻 3
２．論文標題 配偶者を亡くした人にとっての遺骨安置場所の持つ機能	５．発行年 2022年
３．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	６．最初と最後の頁 103-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる・坂口幸弘	4．巻 3
2．論文標題 犯罪によるきょうだいとの死別―親子関係ストレッサーと心理的反応に関する検討―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Akechi Tatsuo、Kubota Yosuke、Ohtake Yoichi、Setou Noriko、Fujimori Maiko、Takeuchi Emi、Kurata Akiko、Okamura Masako、Hasuo Hideaki、Sakamoto Ryo、Miyamoto Seraki、Asai Mariko、Shinozaki Kumiko、Onishi Hideki、Shinomiya Toshiaki、Okuyama Toru、Sakaguchi Yukihiro、Matsuoka Hiromichi	4．巻 52
2．論文標題 Clinical practice guidelines for the care of psychologically distressed bereaved families who have lost members to physical illness including cancer	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Japanese Journal of Clinical Oncology	6．最初と最後の頁 650～653
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/jjco/hyac025	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ito Yoshiyasu、Tsubaki Michihiro、Kobayashi Masahiro、Yagome Susumu、Sakaguchi Yukihiro	4．巻 59
2．論文標題 Effect size estimates of risk factors for post-intensive care syndrome-family: A systematic review and meta-analysis	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Heart & Lung	6．最初と最後の頁 1～7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.hrtlng.2023.01.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有本知可、赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 3
2．論文標題 学校現場における死別を経験した児童生徒とその家族への支援 ―スクールソーシャルワーカーの立場からの事例研究―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 81-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘、赤田ちづる	4．巻 14
2．論文標題 コロナ禍における死別―新たな遺族支援の展開を探る―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人間福祉学研究	6．最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 西岡秀爾・坂口幸弘	4．巻 2
2．論文標題 遺骨を手元に置いていることの意味－配偶者を亡くした人の語りを通して－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 2
2．論文標題 犯罪被害等で大切な人を突然に亡くした遺族が「死者の生きた証」を伝承することの効果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 13
2．論文標題 遺族による死者の生きた証を伝承する活動の意義-NPO法人いのちのミュージアムが少年院で取り組む「いのちの授業」が在院者へ及ぼす効果-	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Human Welfare	6．最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ito Yoshiyasu、Tsubaki Michihiro、Fujimoto Miki、Sakaguchi Yukihiro	4．巻 56
2．論文標題 Exploring the components of the quality of death in Japanese emergency departments: A qualitative study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Applied Nursing Research	6．最初と最後の頁 151371-151371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.apnr.2020.151371	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ito Yoshiyasu、Obana Miyuki、Kawakami Daisuke、Murakami Noriko、Sakaguchi Yukihiro	4．巻 52
2．論文標題 The current status of bereavement follow-up in Japanese emergency departments: A cross-sectional nationwide survey	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Emergency Nursing	6．最初と最後の頁 100872-100872
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ienj.2020.100872	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 瀬藤乃理子、坂口幸弘、村上典子、前田正治	4．巻 1
2．論文標題 新型コロナウイルス感染症パンデミック下における死別の支援	5．発行年 2020年
3．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	6．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 43
2．論文標題 犯罪被害による子どもの死が児童期・青年期のきょうだいに及ぼす影響の探索（続報）―親の感情・認識と親子関係の変化	5．発行年 2020年
3．雑誌名 死の臨床	6．最初と最後の頁 165-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘	4．巻 25
2．論文標題 超高齢社会における死別とグリーフケア	5．発行年 2021年
3．雑誌名 老年看護学	6．最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘	4．巻 62
2．論文標題 遺族ケア	5．発行年 2020年
3．雑誌名 月刊薬事	6．最初と最後の頁 216-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘	4．巻 25
2．論文標題 「喪失」による悲嘆と、求められるグリーフケア	5．発行年 2020年
3．雑誌名 訪問看護と介護	6．最初と最後の頁 356-363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 42
2．論文標題 犯罪被害による子どもの死が児童期・青年期のきょうだいに及ぼす影響の探索	5．発行年 2019年
3．雑誌名 死の臨床	6．最初と最後の頁 201-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤田ちづる、坂口幸弘	4．巻 15
2．論文標題 犯罪被害によるきょうだいとの死別体験に関する研究の動向	5．発行年 2020年
3．雑誌名 心的トラウマ研究	6．最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘	4．巻 91
2．論文標題 死別による悲嘆とグリーフケアの基本	5．発行年 2020年
3．雑誌名 智山ジャーナル	6．最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂口幸弘	4．巻 21
2．論文標題 遺された者の悲嘆と死者の尊厳	5．発行年 2020年
3．雑誌名 兵庫県人権啓発協会研究紀要	6．最初と最後の頁 81-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊東由康、尾花美幸、坂口幸弘	4．巻 39
2．論文標題 救急外来での終末期患者の家族ケアに対する看護管理者の評価および組織体制の実態とその関連	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本看護科学会誌	6．最初と最後の頁 288-297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂口幸弘	４．巻 23(6)
２．論文標題 日本人遺族の宗教性と悲嘆、抑うつとの関連	５．発行年 2018年
３．雑誌名 がん看護	６．最初と最後の頁 612-614
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂口幸弘	４．巻 55(11)
２．論文標題 ビリーブメント	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Medicina	６．最初と最後の頁 1840-1842
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原見美帆、坂口幸弘、白川教人	４．巻 39(1)
２．論文標題 全国都道府県・政令指定都市における自死遺族支援事業の実態調査報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 自殺予防と危機介入	６．最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊東 由康、赤田ちづる、坂口幸弘	４．巻 10(1)
２．論文標題 救急外来で亡くなる患者の家族のニーズ－ケア評価尺度の開発に向けた構成概念の探索的検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Human Welfare	６．最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 坂口幸弘
2．発表標題 死別の悲しみに向き合うーグリーフケアとは何かー
3．学会等名 第26回日本アロマセラピー学会学術大会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 赤田ちづる・坂口幸弘
2．発表標題 遺族支援に関する一般成人の意識ー専門家による支援と遺族会に対するニーズ
3．学会等名 第47回日本死の臨床研究会年次大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 坂口幸弘・赤田ちづる
2．発表標題 わが国のホスピス・緩和ケア病棟における遺族ケアの現状と課題
3．学会等名 第46回日本死の臨床研究会年次大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 赤田ちづる，坂口幸弘
2．発表標題 きょうだいとの死別体験が遺されたきょうだいと親子関係に及ぼす影響の探索
3．学会等名 第3回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 赤田ちづる、坂口幸弘
２．発表標題 事故・災害等で大切な人を突然に亡くした遺族が死者の生きた証を伝承することの効果
３．学会等名 第3回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 坂口幸弘
２．発表標題 豊中市保健所でのグリーフケアの取り組み
３．学会等名 第43回日本死の臨床研究会年次大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂口幸弘
２．発表標題 死別の悲しみを分かち合う
３．学会等名 日本老年行動科学会第22回大阪大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西岡秀爾・泉原久美・安西涼子・伊東由康・赤田ちづる・坂口幸弘
２．発表標題 悲嘆の中にある寡夫・寡婦の日常生活行動－遺族29名の語りから
３．学会等名 第43回日本死の臨床研究会年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂口幸弘
２．発表標題 死別と悲嘆をめぐる複眼的視座とその意義
３．学会等名 第1回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊東由康・尾花美幸・川上大輔・村上典子・坂口幸弘
２．発表標題 わが国の救急医療における遺族ケアの現状と課題に関する全国調査
３．学会等名 第1回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 原見美帆・坂口幸弘・白川教人
２．発表標題 全国都道府県・政令指定都市自殺対策主観課におけるグリーフケアへの認識
３．学会等名 第1回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島麻衣子・中尾こずえ・原見美帆・坂口幸弘・松山とも代・松浪桂・岡本里美・松岡太郎
２．発表標題 豊中市保健所におけるグリーフケア事業の現状と課題
３．学会等名 第1回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西岡秀爾・泉原久美・廣江輝夫・坂口幸弘
２．発表標題 「遺骨の処し方」が悲嘆プロセスに及ぼす影響－寡夫・寡婦への聞き取り調査から
３．学会等名 第1回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 泉原久美・廣江輝夫・西岡秀爾・坂口幸弘
２．発表標題 葬儀社によるサポートグループに参加する遺族のニーズとリスク（2）－遺品整理が悲嘆プロセスに及ぼす影響
３．学会等名 第42回日本死の臨床研究会年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 泉原久美・廣江輝夫・坂口幸弘
２．発表標題 葬儀社によるサポートグループに参加する遺族のニーズとリスク
３．学会等名 第41回日本死の臨床研究会年次大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 坂口幸弘	４．発行年 2023年
２．出版社 創元社	５．総ページ数 144
３．書名 大切な人を亡くしたあなたへ－自分のためのグリーフケア	

１．著者名 石丸昌彦、山崎浩司、坂口幸弘、高橋聡美、黒川雅代子	４．発行年 2024年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 256
３．書名 グリーフサポートと死生学	

１．著者名 坂口幸弘	４．発行年 2022年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 230
３．書名 増補版悲嘆学入門－死別の悲しみを学ぶ	

１．著者名 坂口幸弘	４．発行年 2019年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 224
３．書名 喪失学	

１．著者名 石丸昌彦・山崎浩司・鈴木由利子・会田薫子・坂口幸弘・鈴木康明	４．発行年 2018年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 276
３．書名 死生学のフィールド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関